



小惑星探査機「はやぶさ」宇宙の旅

渡辺勝己(監修), 佐藤真澄(著)

汐文社, 178 頁, 1,470 円

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

本書は日本の小惑星探査機「はやぶさ」の子供向けの物語である。いうまでもないことだが、探査機「はやぶさ」は2003年5月9日にM-Vロケットで鹿児島県内之浦から打ち上げられた工学実験衛星であり、小惑星「イトカワ」に近づいて観測を行い、たび重なる不具合を克服して2010年6月13日に地球帰還を果たした。そして同年11月16日、持ち帰ってきたカプセルの中に、小惑星「イトカワ」起源の微粒子が確認された。かずかずの試練を乗り越えて戻ってきた「はやぶさ」は、日本中で社会現象となり、新聞各紙の2010年10大ニュースにも軒並み選ばれた。

さて、本書の外カバーを見ただけではこれが子供向けなのかどうかよくわからないのだが、帯には「初のジュニア版」、対象年齢は10歳から、と書いてあり、また、そでは「旅立ちから地球帰還まで、なんと7年！本書は、その長い長い冒険の物語です」とあるので、手にとって少し見てみると子供向けということがわかる。とはいえ、内容はたいへん充実している。例えば第一章『いくつもの「世界初」を背負って』では、冒頭に「小惑星は太陽系の化石」と紹介され、大きい惑星は一度溶けてしまっているので太陽系生成時の痕跡をとどめないが小惑星は溶けていないことを説明し、小惑星を探査する意義にきちんと触れている。また、MUSES-C計画の技術実証項目であるイオンエンジン、自律機能、サンプル採取、地球帰還技術についても丁寧に述べられていて、どんなに野心的なミッションであったかがよくわかる

ようになっている。その上で、たび重なる不具合と、そのたびにあきらめずに知恵を絞って探査機を復活させてきた姿が、現場の人の台詞などを通して生き生きと描かれている。

漢字にはルビが振ってあり、また小学生には難しそうな言葉には括弧で説明が書いてあり、子供たちに理解してもらいたいという努力の跡が見られる。例えば、人工衛星の「自律機能」では、地球-衛星間距離が長くて電波の往復に数十分かかる場合、判断が間に合わないために実時間での作業が不可能であることに触れ、そのために自律機能が必要であることを述べ、「自律的(自ら判断し動く能力)」という具合に説明を加えてある。

個人的には、各章のはじめの肩の力が抜けた「ゆるい」イラストもまた楽しかった。私が気に入っているのは5章「絶体絶命」の箇所です。探査機はやぶさの軌跡のようなものが何気ない曲線1本で描かれているのだが、「絶体絶命」の文字と合わせてみると、満身創痍になりながら旅を続けている探査機の様子がよく表されていて感心してしまっ

た。「はやぶさ」が一過性の流行に終わることなく、本書が将来にわたって日本の子供たちに長く読み継がれ、科学や技術への関心を高めてもらうだけでなく、子供たちに決してあきらめないことを教え続けてほしいと願って、星五つとしたい。

野田寛大(国立天文台・RISE月探査プロジェクト)